

「紀念中国同盟会成立 100 周年 暨孫中山先生逝世 80 周年国際学術討論会」（南京）参加記

蔣 海波 中村 元哉

標記の討論会は、さる 8 月 20 日・21 日に、中山陵のある紫金山山麓に位置する「南京国際会議大酒店」（地元のタクシー運転手からは「国会」と呼ばれている）で開催された。主催者は南京大学中華民国史研究センターと孫中山紀念館である。討論会には、中国大陸のほか台湾・香港・日本・米国・韓国・シンガポールから 95 名の研究者が参加し、73 本にもおよぶ学術論文が公表された。中国同盟会の意義を検証することがこの会議の主題であったが、提出された学術論文からは、むしろ中国国民党の歴史や孫文の政党政治に関する理念・組織形態・意義などについて活発な議論が展開された。その関心の高さは 2005 年 4 月の国共両党による歴史的な和解とも無関係ではないだろう。

さて、会議の内容と形式についてであるが、開会式と全体会議につづき、報告者が四つのセッションに分かれる分科会形式が採用され、最終日の閉会式では三本の大会報告と張憲文氏（南京大学中華民国史研究中心主任）による学術総結（閉幕の辞）が行われた。

我々は全セッションに参加できたわけではないが、入手しえた情報をもとに会議の内容について簡単に紹介しておくことにしたい。したがって全面的な紹介ではないことをあらかじめご了承ください。

開会式

大会報告

第 1 報告 茅家琦「關於同盟会宗旨的一些思考」

第 2 報告 張玉法「孫中山与 1924 年的北伐」

第 3 報告 横山宏章「池亨吉与中国革命」

第 4 報告 蔣永敬「關於孫中山革命運動兩大爭論問題平議——資産階級与三大政策問題」

第 5 報告 黄彦「『孫文全集』的編纂」

蔣永敬（台湾政治大学歴史系）報告は、中国大陸と台湾とのあいだで繰り広げてきた辛亥革命の性質と「三大政策」に関する論争について、総括的な見解を示した。辛亥革命の性質について、大陸学者章開沅・林增平は「資産階級民主革命」であると主張したのに対して、台湾学者張玉法は「全民革命」であると主張していたが、蔣氏は辛亥革命を「資産階級民主革命」と定義することには「貶抑」の意味がなく、むしろその不成功を惜しむニュアンスが込められていると指摘した。つづいて、「三大政策」（聯俄、聯共、扶助農工）の出現と政策として

の形成について、陳錫祺・韋慕庭（C.Martin Wilbur）・蔣永敬・李雲漢・魯振祥・狹間直樹・黃彦らの見解を紹介し、「三大政策」という名詞は中国国民党第一回全国大会で正式に使用された名詞ではなく、後に黄埔軍官学校の共産黨員によって提出されたことは明らかであると主張した。併せて、政策の形成過程におけるソ連顧問鮑羅庭（Michael Borodin）が果たした役割も検証した。最後に、蔣氏は『同盟会革命方略』と『中国国民党第一回全国大会宣言』とを対照しながら両者の共通点を指摘し、前期の辛亥革命と後期の国民革命とを一括して「国民革命」と称すべきだとの結論を提示した。横山宏章（北九州市立大学）は孫文が信頼をよせていた日本人同志池亨吉を紹介し、池と「支那浪人」の違いを指摘した。黄彦は『孫文全集』の編纂の重要性について情熱をもって呼びかけた。

《第1分会場》

第1報告：Morris Bian, The Formation of the Nationalist Ideology of the Developmental State during the Sino-Japanese War, 1937-1945

第2報告：Margherita Zansi, The Three People's Principles: History and Memory in twentieth century China

第3報告：毛磊「中国共産党対三民主義的継承と発展」

第4報告：嚴海建「浅析 1924-1949 年中国国民党意識形態層面的劣勢」

第5報告：孫穗芳「懷念我的父親孫科」（訪日のため欠席）

第6報告：範烈孫「範鴻仙与辛亥光復南京」

Margherita Zansi（テキサス大学）報告は、三民主義が再解釈されていく過程を国民党の権力闘争と結びつけながら分析したものである。氏の立場に立てば、伝統思想と結びついた蒋介石の新生活運動も、のちの資源委員会とは異なる発展のあり方を模索した汪精衛（陳公博）の経済政策も、新たな三民主義理論の政治的实践として位置づけられている。蒋介石の側近として三民主義の理論化に努めた陳布雷を検討することが今後の課題であろう。嚴海建（南京師範大学大学院）報告は、国民党のイデオロギー統制がなぜ上手くいかなかったのかを検討する。内容と分析方法には物足りなさを感じるが、王奇生氏の「弱勢」党・国家体制論が中国の若手院生にも浸透していることが分かる。

《第2分会場》

第1報告：馮祖貽「晚清地域文化与同盟会内部分歧」

第2報告：崔之清「從理想到現實的艱難求索——同盟会領導体制的政治学分析」

第3報告：謝俊美「從革命党到執政党——中国同盟会短暫執政的歷史反思」

第4報告：廖大偉「從合作到決裂——辛亥光復前後同盟会、光復会在上海的關係演變說明了什麼」

第5報告：吳春梅「從“民立憲政”到“憲政立民”——以清末憲政改革思潮的演變為例」

第6報告：李玉「試析民初国民党上層的拉人入党現象」

廖大偉（上海東華大学人文学院）報告は、上海「光復」における同盟会と光復会との関係が協調から対立へと変化していく過程を分析し、

双方の行動を規定するものとして私心の膨脹があることを指摘した。李玉（南京大学中華民国史研究中心）報告は、中華民国成立直後、国民党がかつて清朝に仕えた有力者を強引に入党させ、政治勢力を拡大し、国民党による内閣を立てようとしたが、その挙は却って世論に批判されていったと論じた。

《第 4 分会場》

第 1 報告：朱漢国「孫中山關於中国政党政治模式的探索」

第 2 報告：蒋海波「孫文訓政理論探微」

第 3 報告：王培智「孫中山民本思想与和諧社会」（代読）

第 4 報告：李国忠「孫中山憲政悖論与国民党統治時期的憲政歷程」

第 5 報告：錢進「試論孫中山与民主政治制度的建立」

第 6 報告：盧立菊「試論孫中山的政党和国家關係理念」

李国忠（南開大学馬克思主義教育学院）報告は孫文の「権能分治」理論について、その二律背反的な要素を指摘し、これに対する中間勢力の批判は傾聴すべきであると論じた。筆者（蔣）の報告は、孫文訓政論の形成には、1913 年に刊行された日本語訳のロベルト・ミヘルスの『政党社会学』の影響があったことを論証した。なお、報告者の一人朱漢国（北京師範大学）は、筆者に日本の孫文研究の現状について紹介を求め、これに対して、筆者は孫文研究会や孫中山記念館、最近解散した辛亥革命研究会などについて紹介した。

《第 5 分会場》

第 1 報告：林家有「論孫中山改造国民性的思想」

第 2 報告：高華「海峽兩岸孫中山研究的趨同」

第 3 報告：陳蘊茜「時間、儀式維度中的孫中山——以“總理紀念周”為中心的考察」

第 4 報告：李恭忠「“党葬”：孫中山奉安大典的政治人類学研究」

第 5 報告：郭良婧「論孫中山心性文明思想的十大内涵」

林家有（中山大學歷史系）報告は孫文の国民性に対する認識、改造の必要性和その方法・目標について検討した。陳蘊茜（南京大學歷史系）は「国父紀念周」を例として、政治的シンボルとしての「孫中山」が時間や空間・儀式・メディアを通じて如何に国民の日常生活に浸透していったのか、そして国民党統治の正当性を維持するために如何に利用されていったのかを検証した。李恭忠（南京大學歷史系）は孫文の「奉安大典」（靈柩移転式）は「国葬」ではなく、「党葬」として営まれたことに着目し、儀式としての成功は、その達成しようとした「党治国家」の権威を打ち立てる目標に比べて、問題のほうが遙かに深刻であったと論じている。

《第 7 分会場》

第 1 報告：経盛鴻「孫中山与陳其美」

第 2 報告：黄賢強「孫中山与檳榔嶼的革命团体」

第 3 報告：陳希亮「時人眼中的楊統麟」

第 4 報告：沈雨桐「徐錫麟領導的安慶起義与孫中山」

第 5 報告：魏兵兵「權力与理念——也論孫中山与黃興的關係」

第6報告：楊學功「朱執信的“社会主義思想”研究」

經盛鴻（南京師範大学社会發展学院）報告は、陳其美を中華革命党時期の孫文の主要な助手として高く評価した。黃賢強（シンガポール国立大学中国研究学系）報告は、辛亥革命以前に、ペナンで創設された三つの革命団体、即ち同盟会（1906年）、閱書報社（1908年）、光華日報社（1910年）の主要成員を紹介し、各団体の関係と相互の影響について実証的に分析した。魏兵兵（南京大学大学院）報告は、孫文と黃興との決裂には政治理念以外にも権力をめぐる葛藤があったことを指摘した。

《第8分会場》

第1報告：庄建平「孫中山的現代国家認知与实践」

第2報告：朱宝琴「孫中山与平定商团叛乱」

第3報告：張海梅「孫中山与中華革命軍東北軍」

第4報告：鄭忠「浅析孫中山革命依靠力量策略的特点」

第5報告：張華騰「对立中的統一：辛亥革命前後同盟会、北洋集团關係論述」

張海梅（中国第二歴史档案館）報告は、1915年に成立した中華革命軍東北軍（居正）の成立・發展・撤廢過程を档案史料に基づいて分析した。反袁闘争に一定の役割を果たしたとされる同軍について、新たな事実が解明された。朱宝琴（南京大学中華民国史研究中心）報告は、大会報告張玉法（中央研究院近代史研究所）「孫中山与 1924 年的北伐」と内容的に重複する。張報告は、孫文の北伐が困難なものとなった一

因として広東商人の革命不支持を指摘したが、その対立の詳細な過程をたどったのが朱報告であった。

《第11分会場》

第1報告：饒懷民、霍修勇「湘籍志士与中国同盟会」

第2報告：李谷城「同盟会香港分会機關報『中国報』的經費来源」

第3報告：岳謙厚、董佳「中国同盟会与山西革命之発軀」

第4報告：趙洪瑋「孫中山、同盟会与山東同盟会革命活動的深遠影響」（欠席）

第5報告：熊秋良「同盟会財政狀況管窺」

李谷城（香港珠海書院亜洲研究中心）報告は、陳少白が香港で創設した『中国日報』・『中国旬報』（両者は『中国報』と略称）の広告の基本データを整理し、一部の広告主と革命派との関係を解明した。熊秋良（南京大学政治系）報告は、同盟会時期の孫文の財務管理における徴収の任意性と使用の自己中心性などについて論証した。両報告は同盟会の最も重要な問題である資金問題を正面から扱っており、注目に値する。

《第12分会場》

第1報告：蕭致治「黃興与中国同盟会的成立」

第2報告：朱洪強「孫中山開放主義探源」

第3報告：張連紅「孫中山關於中央与地方關係的論述」

第4報告：王敦琴「孫中山の民生主義与張謇の民生關懷——孫中山、張謇民生思想比較研究」

第 5 報告：中村元哉「国民党的新聞自由論
与民権思想——從 20 世紀 40 年代国际情勢
来分析」

蕭致治（武漢大學歷史學院）報告は、引用史料に目新しさはないものの、黃興が中国同盟会成立に果たした役割を再認識させる報告であった。同盟会の組織基盤、第二次革命後の孫文と黃興の決裂などを一定の時間軸の中で考察する際には一つの手がかりになるであろう。なお、筆者（中村）の報告は、孫文死後の民権思想が 1930-40 年代の国際情勢のなかでどのように継承・変化・発展していったのかを報道自由論に注目して分析したものである。（併せて拙著『戦後中国の憲政実施と言論の自由 1945-49』東京大学出版会、2004 年をご参照下さい。）

以上が我々二人が参加したセッションの概要である。それ以外のセッションについては、以下に報告のテーマを収録しておくことにしたい。

《第 3 分会場》

第 1 報告：趙英蘭「論孫中山対日外交観」
第 2 報告：陳立文「孫中山与台湾」
第 3 報告：朴宣泠「孫文对滿洲的認識与五族共和」
第 4 報告：張同樂「孫中山与蘇俄關係芻議」
第 5 報告：楊智友「孫中山与中国恢復海關主權的嘗試」

《第 6 会場》

第 1 報告：朱言明「孫中山先生開發大西部的思想与实践」
第 2 報告：房列曙「孫中山的人才選拔思想」

第 3 報告：李学昌「20 世紀初葉江浙農民社会流動的制約因素」

第 4 報告：張生「当代視角中的孫中山早年重農思想」

第 5 報告：崔巍「張謇与民国初年的中国農業变革」

《第 9 会場》

第 1 報告：陸發春「辛亥革命对 20 世紀中国思想家的影響——以胡適為中心」

第 2 報告：趙立彬「辛亥革命時期上海女子軍团体源流考」

第 3 報告：劉鼎銘「論辛亥革命時期知識女性的自我解放意識」

第 4 報告：張学繼「論辛亥風雲人物李燮和」

第 5 報告：閔強「革命的話語、話語的革命——試析資產階級革命党」

《第 10 分会場》

第 1 報告：史全生「同盟会：国民革命的聯盟——關於同盟会的性質」（欠席）

第 2 報告：沈寂「軍国民教育会与同盟会的成立」

第 3 報告：鄭会欣「参加同盟会第一次籌備會議人数考」

第 4 報告：郭必強「論同盟会成立和南京臨時政府開国之意義」

第 5 報告：郭漢民「同盟会幾個問題的考証」

第 6 報告：季鵬「論同盟会的民族主義」（欠席）

閉会式

大会報告

第 1 報告 李国祁「同盟会時期親密摯友、政争時期生死之敵：汪精衛、胡漢民比

較析論

第2報告 胡春恵「孫中山与聯省自治運動」

第3報告 中村哲夫「中国同盟会与“華僑”」

閉会の辞 張憲文

李国祁（台湾師範大学歴史系）報告は、汪精衛・胡漢民の個人的な境遇や出身・性格・家庭環境などに注目して両者の政治的役割の比較を行った。それによると両者の間には多くの共通点が見られるが、相違点のほうがむしろ顕著であった。汪は聡明利口・自己中心・多重人格であったのに対して、胡は人情・責任を重んじ、厳格な性格をもっていた。革命の過程で両者は深い友情で結ばれたこともあったが、政治権力の前にその友情は消え、死活の闘争へと発展していった。胡春恵（香港珠海書院亜洲研究中心）は、「聯省自治運動」は1920年代の最大の社会運動であり、その規模は五四運動をはるかに上回っていたと指摘し、孫文が辛亥革命の前後で聯邦制を主張するようになり、地方分権論を支持していたことを指摘した。しかし、1920年代になると、聯省自治運動は北伐に反対する口実を南方各省の有力者に与えることになったため、孫文は聯省自治運動を批判し、「統一は先、自治は後」と主張するようになった。こうした孫文の政治行動は明らかに自らの政治理念に反するものであったといわざるを得ない。中村哲夫（神戸学院大学人文学部）報告は、中国同盟会を支えた社会勢力の一つは海外にいる中国人であり、同盟会成立以前に「華僑」の概念がすでに海外華人の自称として活字化されていた新事実を指摘した。そして海外華人の民族運動が革命派の機関誌『民報』によって鼓

舞され、革命運動、たとえば上海「光復」などに寄与していたことを明らかにした。さらに、中国同盟会時期の日中関係史は、昨今の日中関係の困難を乗り越えるための英知を提供するに違いないとも述べた。

会議を主催した関係団体の多大な努力と会議の運営に奔走した院生たちの苦労に敬意を表すとともに、このような貴重な機会を与えてくださったことに改めて感謝申し上げたい。また、会議を通じて地元南京の中国近現代史研究者の層の厚さを実感し、国際会議で若手研究者に経験を積ませようとする会議主催者の意気込みも強く感じ取れた。しかし、全く問題がないと感じたわけではない。例えば、各セッションの構成には任意性が見られ、散漫の印象は否めない。各セッションの報告者の多さもあって、踏み込んだ議論が殆どできなかったのは惜しまれる。今後、院生や青年教師に発表の場を提供する「中青年研究者フォーラム」のような形式が採用されれば、議論がより活性化されるように思う。

〈補記〉「第1・8・12分会場」の内容は中村が紹介し、それ以外の紹介記事は蔣が担当しました。

蔣 海波（JIANG Haibo、兵庫県立大学非常勤講師）

中村元哉（NAKAMURA Motoya、日本学術振興会特別研究員）